

大和川 渡ると別世界?

写真は大阪市立大学術情報総合センターの屋上庭園から撮った。大学本館や法学部棟が見える。グラウンドの向こうに大和川が流れている。大和川を超えると堺市だ。堺市にある府立大と市大の「統合話」が進んでいる。大いに疑問を感じる。先日、堺市役所 21 階展望ロビーから古墳や大和川を眺めた。



そんな折、日経新聞 8 月 27 日夕刊「とことん調査隊」の標題の記事に注目した。リードから一大阪市と堺市を隔てて東西に流れ、大阪湾に注ぐ大和川。堺市などで取材をしていると「川を渡ると世界が変わる」と話す人にしばしば出会う。なぜ、分断の象徴のように言われるのか、探ってみた。

大阪と堺の歴史を探るうえで、大和川は興味深い。記事を抜粋して紹介しながら、大阪・堺のつながりを考えてみたい。

「大和川を渡るとホッとする」。浪曲師の春野恵子さんは堺市で憧れの師匠に稽古をつけてもらい、東京出身だが堺が第二の故郷になった。その実感を込めた言葉だ

大和川を渡る時の思いは人それぞれだが、大阪市と堺市は同じ大阪府内にあり、ともに政令指定都市だ。なぜ差異が強調されるのか。「三里違て大坂(大阪)は各別」。約 12 ㎞しか離れていないが、大阪と堺は全く異なる。江戸時代、既にこう断言した人が浮世草子作者の井原西鶴だ。「日本永代蔵」によれば大阪の商人は派手で刹那的な面があるが、堺の商人は表向き質素で堅実だという。

近世の日本文学に詳しい森田雅也・関西学院大学教授は「中世に南蛮貿易で栄えた堺から見れば、大阪は関ヶ原の戦いの後に栄えた新興都市」と解説してくれた。実は西鶴が生きた 1600



年代まで大和川は分断の象徴ではなかった。奈良に源流をもつ大和川は本来、今の大阪府柏原市から北上し、大阪城の北で淀川に合流していたからだ。しかし洪水対策や新田開発のため 1704 年に付け替え工事が行われ、現在の流路に変わった。気風の違いに物理的な隔たりが加わったといえる。

6 月の堺市長選で、市長が「おおさか維新の会」に代わった。これは大阪「都」構想にも大きな影響をもたらす。大阪とともに、堺の歴史と現在、政令指定都市のあり方について考えていきたい。

(2019年9月3日)